

## 大学への帰属意識向上を目的としたリーダーシップトレーニング —野外活動を用いたプログラム実践—

村瀬 浩二\*<sup>1</sup> 横山 誠\*<sup>2</sup> 相奈良 律\*<sup>3</sup> 船越 達也\*<sup>4</sup>

## Leadership Training to Promote a Sense of Belonging to the University

Koji Murase \*<sup>1</sup> Makoto Yokoyama \*<sup>2</sup>  
Ritsu Ainara \*<sup>3</sup> Tatsuya Funakoshi \*<sup>4</sup>

### Abstract

OIU holds Leadership Training programs for students who participate in extracurricular activities as committee officers. The first purpose of this study was to verify the effects on student's feelings of belonging to OIU and their social skills through programs of Leadership Training with faculty members. The second was to determine any interaction between social skills and feelings of belonging through the training. The training consisted of ASE, cutter boats, outdoor cooking and campus meetings and 88 OIU students (46 male and 42 female) participated. Students completed the KiSS18 and Social Identity Inventory before and after the programs. The results showed significant improvements in feelings of belonging to OIU and social skills through the programs. Also that there was no interaction between feelings of belonging to OIU and social skills.

### キーワード

課外活動、社会的スキル、相互作用

### Key words

extracurricular activity, social skill, interaction

---

\* 1 むらせ こうじ：大阪国際大学人間科学部講師（2011.12.9受理）

\* 2 よこやま まこと：大阪国際大学人間科学部講師

\* 3 あいなら りつ：大阪国際大学非常勤講師

\* 4 ふなこし たつや：大阪国際大学人間科学部講師

## I はじめに

近年、国立大学・私立大学では学生自治組織を対象としたリーダーシップトレーニングを実施している大学が数多く見られる。各大学により若干の違いはあるものの、リーダーシップトレーニングの対象は課外活動団体の幹部（主将・副将や主務・副務など）や学生自治会構成員などを対象にしているケースが大半である。その目的は、課外活動の活性化やリーダーの資質向上、大学と学生との意思疎通などがあげられる。本研究で対象とした本学においても以前からリーダーズトレーニングとして実施している。以前までは学生と大学職員との意思疎通や相互理解を主な目的とし、各課外活動団体が事務手続きで必要とする手続き方法を講習会形式で伝達していた。しかし、近年では学生間のコミュニケーションや職員・教員と学生間のコミュニケーションなどを主な目的とし、宿泊形式での実施となっている。例年の実施形態として、各団体の代表者（ex. 主将、副主将、主務）を対象として、1泊2日で実施している。また、2008年以前は守口、枚方両キャンパスがそれぞれリーダーズトレーニングを開催していたが、2009年からは2キャンパス合同で開催している。さらに2010年からクラブ活動の活性化、学生間、学生と教職員とのコミュニケーションに加えて、大学や所属団体への帰属意識向上を目的に掲げ、ASE（Action Socialization Experience）や外部講師による講義などを行っている。この2010年については横山ほか（2011）は、帰属意識や大学に対するイメージの向上が認められたと報告している。

ところで2010年に実施したリーダーズトレーニングはASEや野外活動、グループワークなどによって構成されていた。このようなASEやプロジェクトアドベンチャー（PA）、野外活動などは心身の開放的効果を持つとされ、これらの活動による心理面への効果検証が多く行われている。例えば福富ほか（2005）はASEやグループワークを含んだキャンプ経験により、積極性や非依存性、交友・協調など社会的能力が向上することを報告している。同様に横山・永吉（2005）は長期キャンプ経験が参加者の日常生活における主体性を高めるとし、飯田・関根（1992）もASEを含めたキャンプ活動が自己効力感を高めることを報告している。これらの研究は、キャンプ活動やASEが主体性や社会性を高めることを示唆している。また大学教育においては、教育効果を目的として掲げた実践研究が報告されている。例えば、川西（2007）は新入生のコミュニケーション支援としてPAを取り入れ、その効果を報告している。また入学時オリエンテーションにおいては、対人関係の向上を目的としたプログラムの実践により、その後の大学生活への不安が軽減されたことも報告されている（西村・石崎、2008）。さらに徳山ほか（2010）は企画力や実践力向上を目的とした大学生による子どもキャンプの運営について報告している。これらのことから社会性や主体性以外にも様々な効果を目的として、ASEや野外活動を教育活動の一環として取り入れる意義は大きい。

しかし本学で実施した2011年リーダーズトレーニングでは教職員や他の学生など大学構成員との協働による大学への帰属意識の向上と、野外活動の効果として社会的スキルの変容を目的としており、これまでの研究報告のなかでは効果検証の対象としては見当たらない。野外活動やASEの効果として社会的スキルの向上については前述の通り多く報告さ

れているが、社会的スキル向上により他の学生や教職員など大学構成員とのつながりを認知し、大学への帰属意識が高まると予想できる。そのため社会的スキルの向上が大学への帰属意識に影響していると仮定できる(図1)。そこで本研究の目的は本学で実施するリーダーズトレーニングがその参加者の社会的スキル、大学への帰属意識に与える効果の検証と、社会的スキルの変化が大学帰属意識の変化に与える影響を検証することとする。

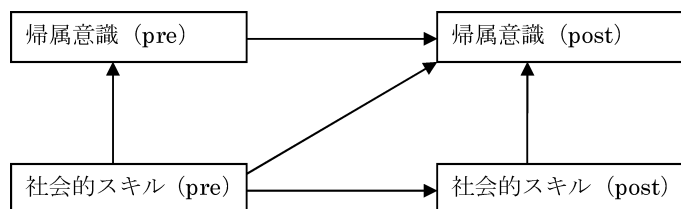


図1 社会的スキル—帰属意識影響モデル

## II 方法

### 1. 対象

本学課外活動団体幹部(主将、副主将、主務など)、学生自治会構成員合計96名対象とした。有効回答者数は88名(男性46名、女性42名)であった。平均年齢は19.8歳(±1.2)であった。

### 2. リーダーズトレーニング実施時期・実施内容

2011年3月に大阪府内の海洋実習施設においてASE(Action Socialization Experience)、カッターボート、事務手続き講習会、キャンパスミーティング、野外炊飯を1泊2日で実施した。ASEとカッターボートについては外部講師に依頼した。また、ASE、カッターボート、野外炊飯については職員、教員が学生と共に参加している。具体的な実施プログラムは表1の通りである。また結果、考察のなかで比較対象とする2010年度のプログラムは表2の通りである。

表1 2011年度リーダーズトレーニング実施日程

時間	3月1日(月)	時間	3月2日(火)
9:30	受付・開講式	7:00	起床・体操・アクティビティ
	カッターボート5艇	8:00	朝食
	練習、レース、タイム計測	9:00	ASE(スパイダーネット、キャッチングザスティック)
12:00	昼食	11:00	野外炊飯
13:00~	ASE(アイスブレイキング、プライ	14:30	カッターボート5艇(前日と同じメン
16:00	ンドウォーク、シーソー)		ンバーによるレース、タイム計測)
18:00	夕食	16:00	閉講式
19:00	事務手続き講習会		
21:00	キャンパスミーティング		
22:30	消灯		

表2 2010年度リーダーズトレーニング実施日程

時間	3月1日(月)	時間	3月2日(火)
9:30	受付・開講式 講義「コミュニケーションスキルと ホスピタリティの重要性」	7:00	起床・朝食 清掃・チェックアウト
12:00	昼食	9:00	課題発表 野外炊飯
13:00	ASE・ニュースポーツ	13:00	キャンパス単位ミーティング・発表
17:15	グループ討議	16:00	閉講式
19:00	夕食・懇親会		

### 3. 調査方法・内容

調査内容：記名による質問紙調査

なお、個人情報については参加者の同意を得た。調査内容は以下の通りである。

- (1) 大学への帰属意識（集団同一視尺度7項目、7件法）(Karasawa, 1991)
  - (2) クラブへの帰属意識尺度（集団同一視尺度7項目、7件法）
  - (3) 社会的スキル尺度 KiSS18（18項目、4件法）(菊池, 1988)
  - (4) 大学、所属団体へのイメージ（記述式、およびそのイメージについての評価：  
+・-、複数回答可）
  - (5) 最も印象に残ったプログラム（記述式）
- これら質問紙を開講式（pre）ならびに閉講式（post）に実施した。

## Ⅲ 結果および考察

### 1. 大学への帰属意識の変化

大学への帰属意識の変化について pre-post 間に対応のある t 検定を用いて比較した。その結果、pre (m=28.1 ; sd=5.6) より、post (m=29.8 ; sd=5.7) が0.1%水準で有意に高かった(表3)。

表3 帰属意識・社会的スキルの pre-post 間の比較

	2011年度			2010年度	
	pre	post	有意差	pre	post
大学への帰属意識	28.1 ( 5.6)	29.8 (5.7)	p < 0.001	27.2	30.4
所属団体への帰属意識	33.0 ( 6.4)	33.5 (6.8)	n.s.	33.2	34.2
社会的スキル	56.5 (10.7)	58.8 (9.1)	p < 0.01	測定せず	

この結果は、2010年のリーダーズトレーニングと同様に、帰属意識が有意に向上していた。これは、教職員や他の学生と共に ASE やカッターなどの野外活動により構成されたリーダーズトレーニングが、大学への帰属意識に対して影響があったことを示している。ただし、2010年度の結果では帰属意識 (pre : 27.2, post : 30.4, p < 0.01) は3.2点の有意な上昇を示したが、2011年度の結果では1.7点の上昇に止まっていた。この大学への帰

属意識に対する効果に差異が認められたのは、この2カ年のプログラムの違いに起因すると推察できる。2010年度ではグループ討議やキャンパス単位ミーティングから、帰属意識をテーマとした討論が長時間にわたり実施されていた。しかし、2011年度では Cutter や ASE などアクティビティを中心とした活動であり、帰属意識の向上を前面に押し出したプログラムではなかった。参加者に対してもその目的は明示しておらず、2010年度のように帰属意識の向上を目的とした討論を行っていない。2010年度については、この討論実施により2011年度と比較しても帰属意識に直接的な効果があったと解釈できる。しかしながら2011年度にも2010年度ほどではないが、帰属意識に有意な向上が認められており、この結果は大学構成員らと共に実施した野外活動による効果と解釈できよう。

## 2. 所属団体への帰属意識の変化

所属団体への帰属意識の変化について pre-post 間に対応のある t 検定を用いて比較した。その結果、pre ( $m=33.0$ ;  $sd=6.4$ ) より、post ( $m=33.5$ ;  $sd=6.8$ ) がわずかに上昇したが、有意差は認められなかった (表3)。

この結果は2010年度の結果 (pre: 33.2, post: 34.2, n.s.) と同様に有意な向上は認められなかった。2010年度、2011年度共に所属団体に対する帰属意識は向上しておらず、このような形式のリーダーズトレーニングでは所属団体に対する帰属意識の向上は期待できないことが明らかとなった。

## 3. 社会的スキルの変化

社会的スキルの変化について pre-post 間に対応のある t 検定を用いて比較した。その結果、pre ( $m=56.5$ ;  $sd=10.7$ ) より、post ( $m=58.8$ ;  $sd=9.1$ ) が1%水準で有意に高かった (表3)。

2011年度のリーダーズトレーニングでは社会的スキルの向上を目的の1つとしていた。そのため野外活動は、周囲とのコミュニケーションや協力によって課題解決が出来るプログラムによって構成されており、その効果として社会的スキルが向上したと考えることが出来る。

## 4. 印象残ったプログラム別の大学への帰属意識の変化

最も印象に残ったプログラムを基準変数として pre-post 間の大学への帰属意識の比較を2元配置分散分析により実施した。最も印象に残ったプログラムは記述内容から、ASE、Cutter、野外炊飯の3種類に分類し、これらを基準変数とした。その結果、最も印象に残ったプログラムを ASE と解答した者 ( $n=39$ ) は pre: 27.7 ( $sd=5.3$ )、post: 29.0 ( $sd=5.1$ ) であった。Cutter と解答した者 ( $n=25$ ) は pre: 28.6 ( $sd=6.0$ )、post: 30.4 ( $sd=6.7$ ) であった。野外炊飯と解答した者 ( $n=15$ ) は pre: 27.9 ( $sd=4.6$ )、post: 29.6 ( $sd=4.5$ ) であった。主効果が認められたのは pre-post 間 ( $p < 0.01$ ) だけであり、印象に残ったプログラムによる差は認められずさらには交互作用も認められなかった (図2)。

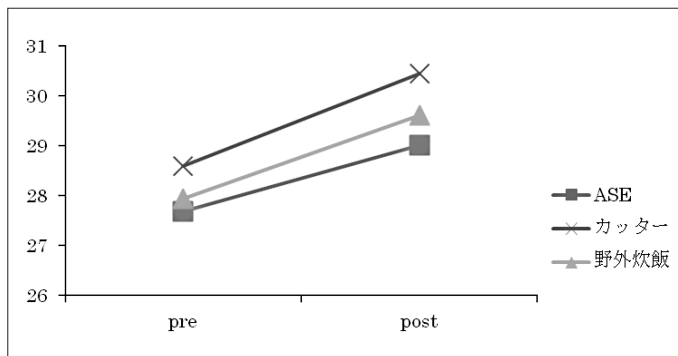


図2 印象に残ったプログラム別の大学への帰属意識 pre-post 間比較

この結果は、印象に残ったプログラムの違いによって帰属意識に与える効果に差が無いことを示している。リーダーズトレーニングに参加した学生達はそれぞれ印象に残ったプログラムを挙げているが、このプログラムは自分に何らかの影響を与えたプログラムと考えてよいだろう。しかし、それらによって帰属意識に差が認められないことから、リーダーズトレーニング全体としての効果が帰属意識の変化として現れたと解釈できよう。

### 5. 印象に残ったプログラム別の社会的スキルの変化

最も印象に残ったプログラムを基準変数として pre-post 間の社会的スキルの比較を 2 元配置分散分析により実施した。最も印象に残ったプログラムは前述の大学への帰属意識と同様の分類を用いた。その結果、最も印象に残ったプログラムを ASE と解答した者 (n=38) は pre : 58.2 (sd=12.0)、post : 60.9 (sd=9.8) であった。カッターと解答した者 (n=22) は pre : 55.5 (sd=7.6)、post : 57.0 (sd=7.7) であった。野外炊飯と解答した者 (n=14) は pre : 55.3 (sd=10.2)、post : 59.3 (sd=9.3) であった。主効果が認められたのは pre-post 間 ( $p < 0.001$ ) だけであり、印象に残ったプログラムによる差は認められずさらには交互作用も認められなかった (図 3)。

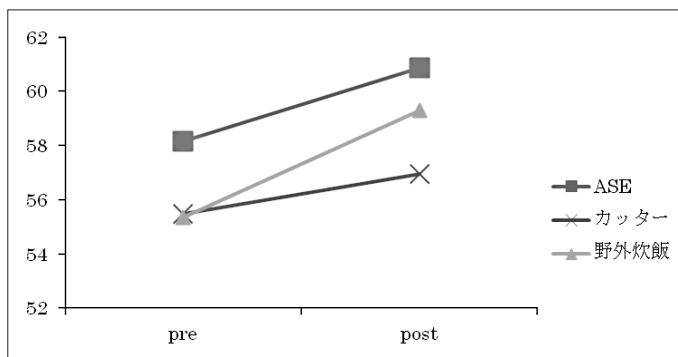


図3 印象に残ったプログラム別の社会的スキル pre-post 間比較

この結果は前述の帰属意識と同様に、印象に残ったプログラムの違いによって社会的スキルに与える効果に差が無いことを示している。この結果についても、リーダーズトレーニング全体としての効果が社会的スキルの変化として現れたと解釈できよう。

## 6. 大学への帰属意識と社会スキルの関連

大学への帰属意識 $\Delta$ と社会的スキル $\Delta$ の相関分析を実施した。その結果、相関係数 $r=0.15$ でほとんど関連が認められなかった。また大学への帰属意識と社会的スキルの相互作用モデルを検証するため、パス分析を用いてそれぞれの因果関係を検討した。その結果、有意な因果関係が認められたパスは社会的スキル (pre) から社会的スキル (post) のパス ( $r=.80$ ,  $p < 0.001$ )、帰属意識 (pre) から帰属意識 (post) へのパス ( $r=.70$ ,  $p < 0.001$ )、社会的スキル (pre) から帰属意識 (pre) へのパス ( $r=.39$ ,  $p < 0.05$ ) であった。これら以外のパスについては有意差が認められなかった (図4)。

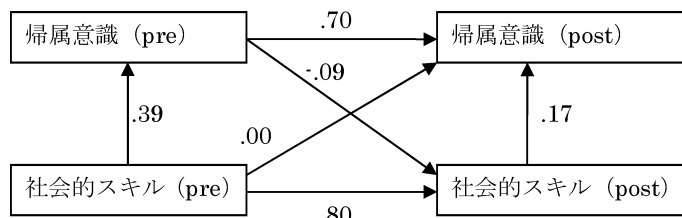


図4 社会的スキル—帰属意識相互作用モデル分析結果

この結果は当初の仮説には当てはまっておらず、帰属意識の向上と社会的スキルの向上が独立していることを示唆するものである。つまり、社会的スキルが向上してもその波及効果として帰属意識が高まっていたわけではないのである。大学教職員や他の学生など大学構成員との関わりのなかで社会的スキルが向上したのであれば、それら大学構成員との親近感が大学への帰属意識を高めると予想されたが、そのような結果は得られなかった。大学への帰属意識は、野外活動における大学構成員との関わりの中で高まったものでは無いであろうか。

## 7. 大学・所属団体へのイメージの変化

大学へのイメージについて pre ではプラスイメージ126、マイナスイメージ132の記述があったのに対し、post ではプラスイメージ134、マイナスイメージ91であった。この結果について $\chi^2$ 検定を実施したところ、0.1%水準で有意差が認められた。また所属団体へのイメージは pre ではプラスイメージ164、マイナスイメージ62の記述があったのに対し、post ではプラスイメージ165、マイナスイメージ67であった。この結果について $\chi^2$ 検定を実施したところ、有意差は認められなかった。

この結果は大学に対するイメージがリーダーズトレーニング前後において有意に変化したことを示唆している。リーダーズトレーニングのプログラムの中では大学のイメージに関する討論など行っておらず、野外活動とキャンパスミーティングのみであった。しか

し、このような内容においても大学のイメージだけに変化が認められたのは、教職員や他の学生と共に活動したことが起因するであろう。2010年の結果においても2011年と同様に大学へのイメージだけが有意に変化しており、プログラム内容に差異はあるがリーダーズトレーニングが大学へのイメージを変化させる効果があると確認できる（表4）。

表4 大学・所属団体へのイメージの変化

	2011年			2010年	
	+	-	有意差	+	-
大学への 帰属意識	126	132	p<0.001	178	113
	134	91		171	70
所属団体への 帰属意識	164	62	n.s.	229	64
	165	67		184	48

このイメージの変化について大学への帰属意識や社会的スキルの変化に関連があることを想定して相関分析を実施した。イメージの変化は pre-post 間でのマイナスからプラスに変化した変化量とし、大学への帰属意識、社会的スキルの変化量との相関分析を実施したが、ほとんど相関は認められなかった（大学への帰属意識： $r=0.05$ 、社会的スキル： $r=0.15$ ）。このことから、社会的スキルと帰属意識の変化の間には関連が認められず、またイメージの変化が中間変数ともなり得ないことが確認された。

#### IV まとめ

リーダーズトレーニングの pre-post 間において大学への帰属意識と社会的スキルに有意な向上が認められ、所属団体への帰属意識については変化が認められなかった。さらに、pre-post 間において大学へのイメージの変化が起きることが確認された。大学への帰属意識や大学へのイメージについては、ASE やカッターなど教職員と学生との協働作業により大学への帰属意識が高まったと解釈できる。さらに社会的スキルについても有意に変化していた。これは周囲との協力や積極的な発言が求められる ASE の効果によるものと推察できる。

また、社会的スキルを高めることにより大学への帰属意識が向上することを仮説としたが、社会的スキルと大学への帰属意識は共変せず、独立して変化することが確認された。このことは、本研究で実践したような野外教育の効果が多方面にわたっており、それらの効果が共変しないことを示唆する。本研究で実践した野外活動のプログラムでは帰属意識や社会的スキルの効能を目的としたが、徳山ほか（2010）が述べるようにプログラム構成によって目的とする効果を変えることも可能である。しかし、その効果を与える要素や大きさは個人の特性によって様々であることが明らかとなった。

本研究では大学への帰属意識、社会的スキルの向上を目的としたリーダーズトレーニングプログラムの効果を検証したが、pre-post 間ではその効果が認められた。この効果が長期的に持続し、さらに一般部員への波及効果となることがリーダーズトレーニングプログラムの目的であるため、今後はその効果を検証していきたい。



## 付記

本論のなかで調査対象としたリーダーズトレーニングの企画、運営、調査に関しては、田中誠守口キャンパスセンター課長、大久保正明前守口キャンパスセンター学生サポートグループ長、貞光啓史枚方キャンパスセンター学生サポートグループ長の多大なご助力を得た。

ご協力いただいた皆様に深く感謝しここに厚く御礼申し上げます。

## 文献

- 福富信也「キャンプ経験がサッカーチームのパフォーマンスに及ぼす影響（2）」、『日本野外教育学会第8回大会プログラム・研究発表抄録集』、p. 42-43、2005年。
- 飯田稔・関根章「キャンプ経験が児童の一般性自己効力に及ぼす効果」、『筑波大学体育科学系紀要』15巻、p. 93-102、1992年。
- 菊池章夫『思いやりを科学する』、川島書店、1988年。
- Karasawa, M., "Toward an assessment of social identity: The structure of group identification and its effects on in-group evaluations", *British Journal of Social Psychology*, vol. 30, p. 293-307, 1991.
- 川西利昌「プロジェクトアドベンチャーを用いた新入生のコミュニケーション支援」、『工学教育』第55巻1号、p. 25-28、2007。
- 西村昭徳・石崎一記「リレーションを重視したオリエンテーションが新入生の大学適応感に及ぼす影響」、『東京成徳大学人文学部研究紀要』15、p. 51-60、2008年。
- 徳山郁夫ほか「大学キャンパスにおける“こどもキャンプ”について～学生プロジェクトの大学教育としての可能性の検討～」、『千葉大学教育学部研究紀要』第58巻、p. 193-202、2010年。
- 横山誠・永吉宏英（2005）「長期キャンプ参加者の日常生活が自主性の変容に及ぼす影響」、『キャンプ研究』、第8巻2号、p. 19-26、2005年
- 横山誠・相奈良律・森本崇資・松尾純子・村瀬浩二「リーダーズトレーニングにおける効果の検証」、『大阪国際大学国際研究論叢』第24巻3号、p. 97-106、2011年。

